全体討論

司会（滑田明暢）

それでは、順番に今の指定討論していただいたことに関して、発表者、話題提供者からコメントをさせていただきたいと思います。まず、初めに発表してくださった福田さんからお願いします。

福田茉莉

まず安田さんからは、これは調査なのか、実は対話的な支援プロセスというものがあるのではないかということに関して、スムーズではない会話の長所と短所ということを考えてみてはどうかというふうなご意見をいただきました。基本的にSEIQoLというものは、QOLを評価する評価法であるというプロセスと、逆に患者さんのQOLというものをもっと引き出すという、何か相反したものを内包している評価方法ということがありまして、確かに対話的な支援プロセスでありながら、マニュアルにも従いながらきっちりやらなければいけないという評価法になっていて、個人的には調査かなというふうに思っています。

スムーズか、スムーズでないかという話に関しては、まずスムーズでない対話ということに関して考えますと、その長所というのは、やはり患者さんが自分のQOLに対して語れるのか、語れないのか、あるいは語れないから出てこないのか、語らないだけなのか、というのを見きわめることができると考えています。

例えば、スムーズでなかった理由がマニュアルによるものであるかもしれないし、むしろ患者さんがQOL、日常生活を語るなんて、おそらく私が来て初めてするようなことだと思います。だからこそ、それについて語るほど、説明するほど資源がないという状況なのか、もしくはマニュアルの問題なのかであるとか、そういう見きわめというものが語ってもらうことによってわかる、スムーズになる対話を分析することによってわかるのではないかとい

うふうに考えました。

中坪先生からのご質問に関しては、もうまさにそのとおりで、ストライクゾーンにボールが来ないときに違和感というものを感じるというふうに、私は思います。

ずれは困難だったかどうかという疑問に関しては、個人的には困難だったということがあります。しかし、これもQOL評価であるということがやはり私の中で中心となっていて、要するに患者さんに語ってもらいながら、ただそれでもQOL評価法として数値も出さないといけないということがあって、どちらかというと、私のスタンスとしてはQOL評価法であるという文脈の方がメインだったので、逆にずれたことで、これはちゃんとCueとして、何かちゃんと答えてもらえるのかなとか、そういったことの方が気になるからということがありました。

ずれは修正対象なのかということに関しても、やはり、むしろ今後の課題としてもっと語りと患者さんからの働きかけというものを見ていくということが、重要な視点になるのではないかというふうに感じて、今後の課題としました。

滑田明暢

続いて、それでは私の方からお答えしたいと思いますけれども、まず安田さんから質問いただいたことで、今から振り返っての語りについてを考えたりだとか、関心がないこと自体をどういうふうに深めていくかということに関してですが、それこそ、まさにその人たちが描いている文脈といいますか、そこで言っていた、当時はこうだったんだというところを丁寧に読み解いていく以外にないのかな、というのが今のところ一つの答えではあります。ただ、なかなか文脈を読み解くというのも複雑で、それぞれの人が共通の、今回出てきた中ではある程度同じような形、当時は男性が女性がというジェンダー役割の形になっていましたが、そうでない形というのもありますので、その違いがどういうことを意味しているのかを考えていかないといけないとも思います。二分法というのはあまりよくないかもしれないですが、まずは

同じところと違うところを見ていきながら、どのような課題があるのかということを検討していきたいというふうに考えています。

振り返っての語りが含まれていたのではないかということに関しては、今回の発表ではなかなか含められなかったのですが、インタビューの中で協力者は、最初の方はこうだった、こうだったんですよといったように、最初はスムーズに答えてくれるんですね。ただ、インタビューでいろいろな話をしている中で、何かすごく入り込んでいくというか、その協力してくださっている方が、でも、あのときはこうだったなというようなことを何か入り込んでいくということがあるように思います。ただ自分が質問に答えているだけではなく、何か自分にも問いかけながら話をしているという部分は、インタビューをしながら感じるところではありますので、もしかしたらそういったところの語りを見ていくと、その人の中での行為や、今までの経験をつなぐ中での意味づけのようなものが見えてくるかもしれないということを今気づかせていただきました。

もう一つの質問で、協力者が２人のときと１人のときではインタビューでのやりとりが変わってくるのではないかというお話をいただいていましたが、それは本当に２人と１人では変わってくるというふうに感じています。実際に語られている内容も、２人での話の場合は、１対１のときに比べると、私にだけ話をしているというわけではなく、そのご夫婦のなかで、いや、こうだよね、こうだよねという、やはり確認し合うことであったりとか、もちろん相手の顔色をうかがうというと何か違う気がしますが、もっとポジティブな感じですけれども、いや、こうだったね、こうだったねということで何かやりとりがかぶさっていっている様子が見えたりだとかということがあります。

また、今回のインタビューに出てきた中にもあったと思いますけれども、実は夫婦でどちらがどういう発言をしているのかということをよく見ていくと、実はずれていったりとか考え方に違いがあったりというのが見えてきたりということもあるので、そのあたりを見ていくのもいいのかなということがあります。もう一つ言えば、そのインタビューの中でその夫婦が本当に話

をし始めるといいますか、お互いが対話しているかのような印象をうけることも実際にはあって、まさにそれは目の前でやりとりの対話が起きているかのようなこともあったりするので、そういったところもまた見ていければというふうに思っています。

中坪先生からのご質問に関しては、まずストライクゾーン、やはりストライクゾーンに来たか、来ていなかったかというところで、ずれがあったかどうかを考えていたということをとても感じた次第です。それが成功であったか、困難であったかといいますと、初めはやはりすごく困難といいますか、これで何か取り立てて研究者として何か見たいと思っていたものが見えない、むしろ見ようとしていたものは存在しないのかということを感じてすごく困難を感じていましたけれども、やはり時間がたつといいますか、しっかりデータを見ていって、特に今回のように微視的視点でもって分析をしていく中で、でもやはり実はその反面、何かここにあるのではないかなという予感みたいなものが自分の中に、相反するものですけれどもあって、それを見ていくと、実はこうだったのではないかなというところで気づきがあったということは、ある意味で、私の経験にとっては進展であって、実際いろいろな議論ができるところに話が行っているという意味では、最終的には自分の中では、そして研究にとってもよかったのかなというふうに思っています。

しかしながら、自分のもともと持っていたリサーチクエッション自体も、前提がずれてるかなと感じたことはありましたが、違う方向で何とか聞ければということを考え、別の問い方があるのかを考えて、本当にそのリサーチクエッションで想定しているものはないかもしれないですけれども、また何かほかの聞き方をして見ることができるかどうかを、インタビューをする中で実践できればなというふうに考えています。

最後に、50代、60代の方で協力してくれた方からどう見えていたのかということに関しては、おっしゃっていただいたとおり、おそらく本当に息子の連れぐらいの、息子の連れほどまで近い位置にはないかもしれないですけれども、若い人が話を聞きに来ているのに対して、興味を持ってではないですけども、インタビューを受けてくれて話をしてくれているということで、そ

の人たちは自分にとってある程度答えてくれてるといいますか、ネガティブにはまだ考えてもらっていないのかなというふうに思います。それでは、これでお答えとさせていただきます。

木戸彩恵

安田先生、中坪先生、ありがとうございました。まず、この研究自体の先生方と私の間でのずれというところを修正しなきゃいけないかなというところが、まず初めにあるんですけれども、この調査自体を行ったのは私ではなく、修了生のデータを私が再分析したものになります。そういうわけで、私自身がインタビューをしたという前提を共有できていなかったところに関しては初めにお詫びさせていただきます。

その前提に立った上でお答えしていきたいと思いますけれども、まず安田さんからの化粧はケアなのかというご質問があったと思いますけれども、ケアなのか、ビューティフィケーションなのか、ケアとビューティフィケーションの間でいいのかというようなことが論点だったかと思いますけれども、まず私も、この判断はまだ迷っているところではあります。ケアとビューティフィケーションというのは、装い研究の中では、ケアとビューティフィケーションの両方が装いの範疇に含まれるという前提があります。したがって、それが何かということを考えるときには、ビューティフィケーションとケアという軸自体は割と曖昧というところがあり、便宜的に分けている段階なので、これから先も考えて修正していきたいと思います。

男性の化粧自体、ケアなのかというご質問に関しては、男性の化粧が載っている本がありまして、普通に本屋さんで売ってあるような本ですけれども、男性の化粧の場合、身だしなみの本として売られてあります。これも調査協力者の男性の方の語りの中で得られた回答だったので、もう少し身だしなみブックを見ていくということで、ヒントを見つけていけたらということは今考えています。

もう一つ、広義の化粧がどのレベルで統一、理解されていたのかというところですが、これは一応調査者と調査対象者の方が共通理解を受けた上でお

話をしていますけれども、やはりインタビューが進んで時間がたっていく中で、ちょっとその共通理解が薄れていっているということはあるかもしれないです。

あと、インタビュアーをとらえているかということに関しては、中坪先生のラポールのお話とも関係があるかと思いますけれども、いろいろなレベルでお知り合いの方を集めてきていたというところがあって、例えば後輩や先輩であったり、同級生の話であったりということで、もうそれぞれの語り方が違うんですよね。やはりその語り方の違いだとか対象者の違い、もちろん個人差というのはあるかと思いますけれども、語れる範囲というのはそれぞれ変わってきていたというところはすごく露骨にあらわれていました。

最後の質問の、何を見ていこうとしているのか、その工夫は、というところに関してお答えさせていただきます。私の目指すところというのは、日常生活の中での化粧行為、社会文化的な文脈、時空間の中でどういうふうに装いや振る舞いといったものが展開されていっているのかということを中心に研究したいと思っています。

次に、中坪先生の指定討論にお答えしたいと思いますが、ずれこそがリアリティーというお話があったと思いますけれども、ずれから何を見たのかというところに関して、やはりずれから学びのきっかけがあったのではないか、ポイントがあったのではないかと思います。やはり質的研究をしていく大前提として、新しい関係を得ることができるというところが大きいと思います。もともと第３のものが出てくるということは、質的研究の中ではいいところだなと私は思っていますので、そこもやはり大切にしていきたいと考えています。

また、ストライクゾーンに調査者、協力者のボールが来ないときがすごく多いデータでしたので、取り扱いたいなと思い、資料を受けて分析を行ってきたのですけれどもどうしたらこのような消化不良の調査ができるのかなというところを考えたりしています。しかし、私が今まで行ってきた研究が、女性の化粧の研究ということで、勝手に語ってくれるんですね。女性同士でしゃべっているので。しかも、私よりももっとお化粧のプロ、本当にプロフ

ェッショナルな方に対してインタビューをするということを私は行ってきましたので、もう本当にたくさん語ってくださる。そうした研究をしてきた中で、お話との違いがあるということで、ものすごくもやもやしながら分析をしていたのですけれども、そういうところで楽しめた、興味深かった部分はあります。また、完全に客観的な第３の視点として研究を眺めていたいなという思いもあって、この分析をしていました。

最後に、ぼさぼさの髪でダサい状態で研究をするとなると、私自身がしっかり話を聞けるのかなといったような、自分自身への不安があると、言われてみて思いました。やはり本当にどこかに出ていくからこういう装いをする、装っていると思うのですけれども、その前提が崩された場合、そのモードになれるのかなというような、そのあたりはやってみてもいいかなという気がします。ご協力いただける方がいればよろしくお願いします。お答えになっていましたでしょうか。ありがとうございました。